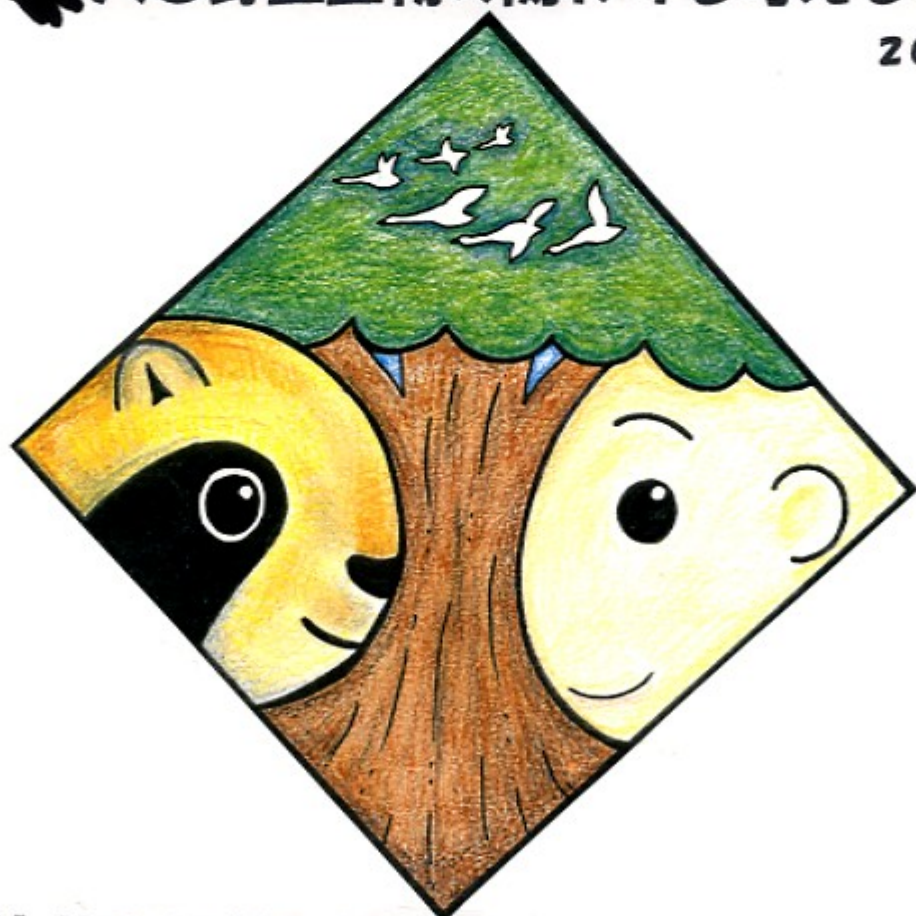


パシクル カント



人と野生生物の関わりを考える会 Vol. 1

2011年7月発行



“パシクル”はアイヌ語で「カラス」、

“カント”「空・天空」という意味です。

空を見上げたとき、カラスが飛んでいる…

そんな自然なことが幸せなのです。

考える会・会報に寄せて

-人と野生生物がともに健康にらせる街づくり-

当会の企画提案「人と野生生物がともに健康にらせる街づくり」に平成 23 年度旭川市協働のまちづくり事業より助成をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

当会は人と野生生物の適正な距離・軋轢の少ない共存を求めて過去

- * 永山新川の餌やり問題
- * 勉強会・自然観察会・フォーラム
- * スズメ集団死への調査協力
- * 各種行政・公民館百寿大学での講演会・自然観察会・バードウォッチング
- * 小中学校への出前授業（主催旭山動物園）
- * 生き物思いやり線パネル設置
- * みどりの回廊展参加

などの活動を継続してきました。さらに新しい活動

- * 幼児～小学校低学年向けパネルシアターを利用した訪問活動および
 - * 体験型総合学習会の企画・提供
- も予定できるまでになりました。

今回平成 20（2008）年 6 月 22 日に設立して以来、メールを主たる連絡・通信・広報を手段としてきた当会が、会報を出しました。これにより、媒体を広げることで多くの市民に当会の活動を知っていただき、協力参加を求めたいと思います。

人と野生生物の関わりを考える会 代表 柳田和美 (2011/07/07 記)



人と野生生物の関わりを考える会

野生動物に餌をあげたことがありますか？
餌をもらった動物のその後の暮らしを考えたことがありますか？

私たちは野生動物と人が共に平和に暮らしのためにどうすればよいか考えるための市民グループをつくりました。(平成20年6月)

基本趣旨

旭川を流れる永山新川におけるカモ、ハクチョウ類への餌やりやスズメの大量死を一つのテーマに人と野生生物の関わりについて考え行動する市民組織。

目的

身近な自然を心から愛し人と野生生物のお互いが快適に暮らせる自然環境と人間社会を創る。

構成

一般市民、野鳥の会、自然保護団体、行政(旭川河川事務所旭川総合振興局、旭川市、旭山動物園)

活動

自然観察会の野生動物や高病原性鳥インフルエンザなどの感染症についての勉強会、餌やりが与える影響についての解説看板の設置、餌やりや餌台のマーチについてのチラシ配布、小学校への出張授業(餌やり問題や外来種)



キーワード 野生生物の関心と距離感

今後の活動

H23年度旭川市の協働プロジェクト事業として旭山動物園と連携して活動を行います。小学生を対象にH23.8月とH24.1月の2回予定旭山動物園や旭山公園また永山新川にて動物の観察など体験型の学習会を行います。

① 体験型総合学習会

② 自然観察会、勉強会と清掃活動

永山新川「生き物思いやり条約」にてカモハクチョウなどの観察や餌やりや高病原性鳥インフルエンザなど感染症についての勉強会、河川の清掃活動を行います。

③ 「命とまごころ(仮称)」フォーラムの開催

平成24年2月25日予定 動物園関係者をはじめ専門家、研究者、行政の方を講師に招き、様々な視点から生物多様性について市民と共に考えるフォーラムの開催をします。

④ 会報誌の発行

初回刊のほか、8月、10月、12月、2月発行。活動内容や日時のお知らせをさせていただきます。

⑤ 「いねるニアタービ楽しく学ぼう野生生物」

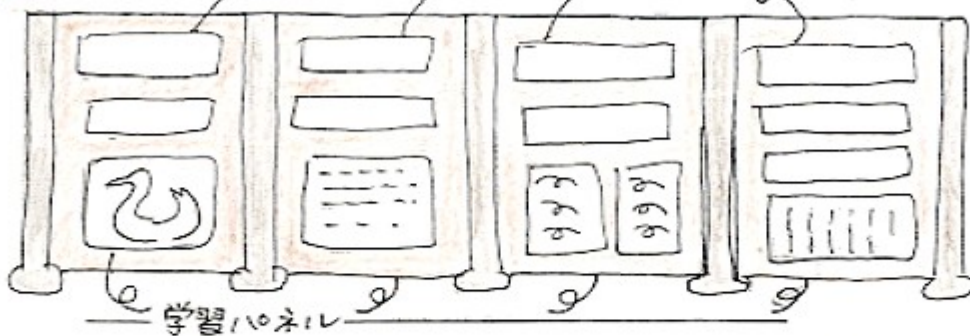
小学生から大人まで幅広い年齢層の方が約100名参加しています。野生動物の本来の生き方、人との関わりについて考えてみませんか？参加お待ちしています。

「人と野生生物の関わりを考える会」
原田 TEL/090-3893-4877
e/mail/wakka2011@yahoo.co.jp



人が野生動物を気づかい 離れせつと見守るフェンス

観察窓... 野鳥も静かに観察できる。



フェンス... 高さ1m90 幅16m
木製 増水時、災害時取りはずし
移動が出来ます。

場所... 永山新川~中津別天橋と第一北入橋の間
三河川敷にあります。
永山新川~最盛期にはハクキヨウが約8000羽
カモ類は約2万羽が集まる。

「生き物思いやり線」

永山新川では、ハクキヨウやカモなどの野鳥に対する餌付けが行われてきました。餌やりに伴う糞や餌やカサカサに集まった野鳥の糞が三河川を汚染し、またゴミの不法投棄が周囲の自然環境に悪影響を及ぼしています。さらには野鳥間および野鳥から養鶏鳥へ高病原性鳥インフルエンザなどの感染症の起りやすい状況も懸念されています。

「人と野生動物の関わりを考える会」では、このまじに自然観察会や勉強会を兼ね、餌付けが引き起こす環境問題について考えました。

●●●の結果●●●●●

H22年12月 日本野鳥の即興も得て永山新川に フェンス「生き物思いやり線」を設置することができました。

フェンスには、ハクキヨウやカモの生態や餌付けが及ぼす影響などについて書かれているパネルが貼られている。環境教育のための学習スペース(空間)になっています。

昨年12月市内の幼稚園の園児達が自然観察会を行いました。

●●●目指すゴール●●●

物理的な壁として餌やりが びびるようになることではなく、(主目的)境界線としての1レベルづくり。

野生動物への思いやりとは「気づいたらもう せつと 離れて 静かに 優しく見守る」こと。

野生動物に干渉し過ぎない適度な自然認識を育む普及空間になることを願っています。

この会を通して、一市民として「伝える」ことから「行動ある」ことへ
重き始めたと思います。
これから、皆様のご理解とご協力が欠かせません。
一人ひとりの理解と参加を目指しております。
宜しくお願い致します。



エゾシカ

旭山動物園
エゾシカ飼育展示係

奥山 英登 さん へ 聞いた
エゾシカの 言語



旭山動物園のエゾシカのもぐもぐタイムは、いつもお客様の笑い声であふれている。奥山さんのトークは楽しくワクワクさせられる。でも。。。楽しいだけではないのに響くエゾシカの語が印象に残る。

エゾシカの今の現状について

今、北海道ではエゾシカが増え続けている。農業被害、森林の破壊や、交通事故などが起きています。そして害獣として駆除されています。北海道のエゾシカは、この先どうなるのだろうか？

エゾシカと人の距離感について どう思われますか？

近いようで遠いんです。僕の役割としては、それを近づけるためにあとのびはないのかという気がしていたんです。北海道の動物も全て知っているわけじゃないですが、無関心が一番良くて、たとえば共存に対する考え方を押しつけるものではないと思います。

教育環境もやっているし、気がまが大事にやっていくと思います。教えるものではなく、あもしろい、と思うことから始めるのじゃないかと。。。距離と言われたら、難しいけれど、まずは「知る」と、じゃないかと思っています。

エゾシカの意外と知らないうちと

毎年エゾシカのオスの角!!って生え変わるんです。秋は、めたくらとって、泥や尿をからだに、ぬりたくら化粧品のようなもの。汚くみえますが、リリしい。エゾシカのアペール。秋は、恋の季節です。♡♡♡

エゾシカの春〜夏のからだ

エゾシカは、四季がはっきりとしていて春はあどく汚いんです。理にかなっていていると思うんです。北海道の春は雪解けでエゾシカが出るので、だからエゾシカも汚いのでは。。。夏は森がみせると生い茂るようにエゾシカも白い斑点の模様になります。

奥山さんの趣味は？

旅行♡ 家族と出かけて、知らない方との出会いはとても楽しいです。笑顔と話していただきました。★ 学芸員、教育活動の担当としても、活躍しています。



エゾシカの今の背景から、身処に共存している野生動物の未来は、どうなるのだろうか？と、考えてみる機会になりました。 担当 ワッカ

鈴木悠太さんにおききました

キタキツネのおはなし



“キタキツネ”ときいて、みなさんはどのようなキツネの姿を思い浮かべますか？



「かわいい。観光地でエサをあげたよ。」
「旭川の住宅街にもよくいるね。神楽岡公園にもすんでいるよね。」
「エミノコックスが寄生しているんでしょ？こわい!!」

キタキツネは私たちにとって、とても身近な野生動物ですよね。
しかし、その“身近さ”には誤解もたくさんあります。

🐾 エミノコックスって？

エミノコックスは外来(もともと日本にはいなかった)寄生虫で、毛皮をとるために外国からキツネを輸入して、私たちが持ちこんでしまった、ともいわれています。
手洗いのような基本的な衛生を日常的に行っていれば、恐れすぎるものではありません。

住宅街に顔をみせるキタキツネ—目的は人間が出す生ゴミ・人間があげるエサ
道路を横断し、人間の生活圏へやってくる…

そのキタキツネの運命を想像したことがありますか？

🐾 キツネの姿…それが“自然”

「動物園のキツネの前を“くさい”と通過するお客様がいますが、それは当たり前のこと。
嗅覚で生きている動物なので、その匂いによって、縄張りを確保させたりと、そういった意味がしっかりとあるんですね。」…と鈴木さん。
また、「やせていてかわいそう。」とエサをあげたくなる気持もあるかもしれませんが。
しかし、それは季節によって獲得できるエサが異なるキツネにとって自然なことなのです。



- “ 北海道のマスコットの的存在として歓迎したのが人間であれば”
- “ キタキツネ=エミノコックス、とレッテルを貼ったのも私たちが人間です。
- “ キタキツネとどのように共存していくべきか、それを考えるのも、やはり人間ではないでしょうか…。

鈴木悠太さんちよっぴりプロフィール 趣味:サッカー・バイク
4年前から日本ではまだ成功例のないキジバトの人工孵化・育雛の研究にも取り組み、育雛中は誰せ家に連れて帰り1~3時間ごとに給餌するそうです。キジバトに愛情たっぷりパパ鈴木悠太さん(23)は独身です。

さわやかな笑顔が本当に素敵な鈴木さん、
動物園のパウセカムイとしてのご活躍、期待しております。

※「パウセカムイ」とはアイヌ語で「キツネの神様」という意味です。

担当・アシリユニ



活動予定内容を紹介

パネルシアター 訪問活動

市内の幼稚園・保育所・小学校・福祉施設
を訪問し、野生生物のお話をさせていただきます

* パネルシアターとは…

歌や物語によって、布の貼った舞台に絵人形が登場しお話を展開していく教材で、幼稚園・保育所・小学校などでよく使用されています。生き生きと動く絵人形と音楽に、大人も子どもも心引き込まれます。

* パネルシアターのお話の内容(例)

「ゴミを荒らして街を汚す。」「こわい。」「きたない。」と嫌われていることの多いカラスは、私たちにとって最も身近な野生動物ですが、実は、“よく知っている” ようで“本当のことは知らない”、誤解の多い野生動物でもあります。カラスは、自然界でたくましく生きており、実はとても家族への愛情が深い鳥であること、生き物の死体・虫や小動物などを食べて自然環境を浄化する役割があることなど一般には知られていない生態が多いです。このような素晴らしい野生生物の話題を、パネルシアターを用いて、音楽・手遊びにのせてお話します。

* 訪問対象となる教育機関・施設

幼稚園・保育所・小学校・福祉施設など、ご希望があればどちらへでもお伺いいたします。(日時・詳細についてはお問い合わせ下さい。)

「どうしてかな?」「そうだったんだ!」子ども達の思考・気づき・発想により展開される野生生物のお話。私たち人間は、多くの野生生物と共存し、命を繋ぎ合っています。野生生物の様々な生態・人との関わりを知り、「すごい!」「かっこいい!」と感じた、こどもの心には、きっと自然を大切に思う芽が育まれることと思います。素晴らしい野生生物のお話の世界へみなさまをご招待いたします☆



問い合わせ先(原田)090-3893-4877

wanwan.keon-sache@ezweb.ne.jp
wakka2011@yahoo.co.jp

一つの地球、一つの健康

～人と野生生物の関わりを考える会が目指すもの～

私たちが毎日食べている魚や野菜などの自然食材は、自然からの恵みです。これは、地球上の様々な生き物がバランスを保ちながら共に生きている（生物多様性）おかげ。私たち人間を含む様々な生き物が生態系で役割を果たすことで、私たちは、自然から様々な恩恵（生態系サービス）を受け続けることができます。

動物が生きていくために、植物、森は欠かせません。森のはっぱが地面に落ち、土に栄養を与えます。その栄養は、雨水とともに川から海へ流れ、植物性プランクトンやコンブなどの海草を育てます。そして、動物性プランクトンを育て、小魚や貝などの生き物を育てます。さらに、サケやマグロなどの大きな魚を育てます。つまり、豊かな森が魚や貝などの生き物を育て、豊かな資源を産み出します。私たちは、森から、酸素や水の他にも、これらの自然からの恵みをいただいているわけです。

カラスは、人が出したゴミを荒らす悪者として嫌われることが多い動物です。このたぶん一番嫌われている最も身近な野生動物だって、私たちの暮らしを支えています。カラスは、森や街の虫や動物の死体などを食べる“地球のおそうじやさん”です。カラスがいなくなると、虫やネズミなどが増えすぎ、木が枯れ、森は不健康になってしまうでしょう。そう考えると…、カラスが森の健康を守っていると言っても言いすぎではありません。へびも嫌われ者ですが、ネズミを食べて数が増えすぎないように保つ役割があり、やはり森を守っています。

すると、すると… そうです！ カラスがいるおかげで、森の健康が守られ、私たちも大地、川や海から恵みをいただいているのです。カラスにおそわれると言いますが、カラスが人に攻撃するのは、繁殖期だけで、自分たちのヒナを守るためです。カラスに街を汚されると言いますが、私たちがゴミをちゃんと出せば荒らされません。むしろ、虫や生き物の死体などを食べ、街をきれいにしています。

自然環境は絶妙なバランスで健康に保たれています。ミミズ、オケラ、アメンボだって、カラス、へび、毛虫だって、地球の健康に必要です。私たちは、特定の動物、特にハクチョウ、スズメやキツネなどの“かわいい”動物に餌を与え、やさしくした“つもり”になります。でも、そのえこひいきは、生態系のバランスを崩し、行動生態を変えてしまい、人とのトラブルや感染症を発生させるなど多くの問題を引き起こします。

野生動物は、人間に餌をもらわなくても、厳しい自然の中、自分で餌をとってたくましく生きています。野生動物も人も平和にくらすためには、私たちが野生動物と適度な“距離感”を保つことが必要です。大好きでもっと近づきたいのだけれども、そっとかけから温かく見守る…、のが本当の愛情ではないでしょうか？一番大切なのは、野生動物や自然への“感心・興味”だと思います。そして、自然について広く“知る”ことです。

昔からずっと身近で共に暮らしてきた生き物たちが健康で生き続けられる地球環境がある限り、私たち人間も健康に生き続けられるでしょう。私たちの身近な自然環境は、水（海）、空気（空）で地球全体とつながっています。そして、もう一つ、人間同士でもつながっています。私たちが身近な自然環境を大切にしていけば、人間同士で力を合わせれば、北海道から日本へ、日本から北極、南極、ホルネオ、アフリカへその想いは伝わっていくはずで。

みんなで、一つの地球、一つの健康を守って行きましょう！考える会で共に活動しましょう！

福井 大祐（人と野生生物の関わりを考える会事務局長、旭川市旭山動物園獣医師）